留園から蘇州博物館へ

朝は日本における習慣通り、体操をしながら小一時間ホテル周辺を散歩する。

散歩は中国語でも同じ漢字を書き

「サンプ」と発音する。ホテル（中国語では酒店あるいは飯店）は交差点の角にあり対面にコンビニ（ローソン）がある。

中国ではコンビニを「便利店ビエンリーディエン」と称す。そこをのぞき書き易そうな

筆記具を数点求めた。

私は文具愛好家で外国を訪れたら

いつも筆記用具を求める。中国は日本

の下請けでメイドインチャイナの文具を

作ってきたので品質は悪くない。但し、

東京特殊製
三松教材社

日本の文具メーカーのデザイン競争力には
及ばないようだ。
午後、深圳（しんせん）（香港に隣接する経済特区）
在住のマネジャー、ウォン氏夫妻が車で迎え
に来てくれた。

「観光より先に食事をしよう」と誘われ、
市内のビル階上の料理店街に案内された。
いろんな蘇州料理が出てきたが、ユニーク
で美味な一品があった。「松[redacted]鼠桂魚」とい
う手のこんだ品だ。高級魚である桂魚の骨を

東京特定原稿
三松製料理

すべて取り除き、リスの背中の形に切り込む。それを揚げ、上から甘酸っぱいタレを何度もかけ、魚肉に味をしみ込ませる。

美味であった。

次に蘇州四大庭園のひとつ「留園（リュウユアン）」を訪れ

た。総面積二万平方メートルの広大な敷地に
東園、西園、南園、北園が並び立つ。
その園から園につながる長い回廊があり、
その長い壁に中国歴代の著名な書家の
墨蹟が黒地に白で延々と続く。

私はもっと見続けたかったが、ウォン夫妻と家内はつまだ有るのかと書作品に食傷気味で、途中で観覧を打ち切った。

次に、蘇州博物館へと足をのばした。車の運転は大柄なウォン氏の奥方で、まさに

ミの夫婦だ。彼女は「蘇州は初めて」と言い
つつもナビを頼りに見知らぬ街を器用に
移動する。
三十分くらいで博物館に着いたが、その収
蔵品の品目の多さと種々雑多な組合わせに

東京地学協会
三松教科書

驚いた。

帰りに売店で立派な水墨画集を五冊求めた。著名な画家、石濤、王蒙、趙孟頫（歴史に残る元の時代の文人墨客で書も巧みで、画では馬の絵の名手）、柯九思、

龔賢の画集で、墨の色の印刷が実に良い。

家内は炎天下を歩いたせいで、やゝ熱中症

気味のため早くホテルに帰り横になりたい、

と言う。だから、寒山寺は翌日まわし

になった。

東京帝国大学
三校紙対策